

『西の魔女が死んだ』世界の再考 ——本編と短編作品群を中心に——

劉 冠 玟

はじめに

2017年4月に、梨木香歩のデビュー作『西の魔女が死んだ』は『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』（新潮社、2017年。以後、作品の引用はすべて同書による）というタイトルで再び単行本として刊行された。こちらには、本編の『西の魔女が死んだ』以外に、これまで発表された短編「ブラッキーの話」と「冬の午後」、及び書き下ろしの「かまどに小枝を」の3編が収録された。この3作品は『西の魔女が死んだ』の спин・オフとなっている。その他に、2014年には梨木の短編を中心に収録した『丹生都比売 梨木香歩作品集』（新潮社、2014年）も出版されており、この両作が続いて出版されたことで、今日、梨木の初期作品が再び脚光を浴びている。特にデビュー作の『西の魔女が死んだ』はロングセラーになり、2008年に映画化された。2009年11月号の『ダ・ヴィンチ』によると文庫本の発行部数が累計で189.9万部、その後、2011年2月14日の『読売新聞』夕刊によると文庫版が196.4万部に達し、現在は200万部を超えていると推測できる。2019年の現在でも、子どもの成長を描く作品を論じるときに、『西の魔女が死んだ』とその映画がよく言及される¹。

20年以上読まれ、愛されている『西の魔女が死んだ』に関する書評や研究は多数あるが、先行研究では、心理分析（根本真弓、23-32）やテキスト分析（沢崎友美、55-74）が主である。その中で、佐藤宗子が『西の魔女が死んだ』から梨木香歩の今までの創作を取り上げ、『西の魔女が死んだ』とその短編を踏まえて梨木香歩作品群の世界をより全面的に検証した（60-63）。しかし、佐藤宗子の論以外に、『西の魔女が死んだ』とその短編との比較分析はあまり見られない。作者の梨木は『西の魔女が死んだ』の出版以前も出版以後も、その спин・オフを創作し続けている。彼女の創作における『西の魔女が死んだ』の重要性は言うまでもない。したがって、本論文は2017年に再刊行された新たな単行本をテキストとして、そこに収録された短編と本編を中心に比較し、検討する。さらに、単行本に収録されていない短編にも焦点を当て、『西の魔女が死んだ』の短編作品群を時系列に沿って整理することで、より全面的に

『西の魔女が死んだ』世界の把握を試みる。このように、『西の魔女が死んだ』作品群²を通して、テキストをより深く解析し、本編と短編作品群からなる『西の魔女が死んだ』世界の構成を考察する。

本論文では、まず、『西の魔女が死んだ』本編とそのスピン・オフである短編作品群を取りまとめて分析する。次に、未発表作以外に、発表された7つの短編を短編作品群として捉え、本編との関連性を、内容構成や叙法などから、時系列順に整理する。最後に、2017年の再刊行版を中心に、『西の魔女が死んだ』本編（以下、「本作品」と記す³）とそこに収録された短編作品群を検証したうえで、『西の魔女が死んだ』世界をさらに一步、深く解析すると同時に、梨木の創作意図を把握したい。

第1章 『西の魔女が死んだ』本編とその短編作品群

本作品では、中学に進んでまもなく、どうしても学校へ行きたくなくなった少女まいが、季節が初夏へと移り変わる1ヶ月あまりを、「西の魔女」（まいの「おばあちゃん」）のもとで過ごした日々の物語である。主人公のまいは、「おばあちゃん」から、魔女の手ほどきを受けるのだが、その魔女修行の肝心かなめは、何でも自分で決める、ということだった。本作品を論じるとき、おばあちゃんとまいの関係に注目しがちであるが、おばあちゃんの娘であり、まいの母でもある「ママ」の存在は見逃されることが多い。しかし、祖母と孫だけではなく、親子3世代の関係が本作品の重要なテーマの1つであると思われる。本作品から発展した短編作品群には、親子3世代の関係を描いたものが何作もある。そこで、本作品と短編作品群を繋げる重要な鍵として「親子3世代」という側面から本作品を分析して解釈する。本章の第1節では、親子関係から本作品の世界を把握する。第2節では、本作品とそれに関わる短編作品群を中心に、『西の魔女が死んだ』短編作品群を出版順に整理しながら、物語の時系列を確認したうえで、短編作品群が持つ意義と果たした役割をもう少し詳しく見てみる。

第1節 『西の魔女が死んだ』本編の分析——親子3世代の「選択」——

斎藤美奈子は、児童文学で定番化されたパターンについて、「傷ついた子どもが田舎の祖父母の家に行き、自然の中で癒されて、生きる希望を取り戻す」というパターンがあると指摘し、本作品はそのパターンを踏んでいると主張している（146）。このパターンは「祖父母—孫」という図式でも表現できるし、児童文学によく見られる

「老人—子ども」というペアでもある。前述したパターン、図式、あるいはペアは、どれもおばあちゃんとまいにのみ注目し、まいのママの存在はほとんど除外される。しかし、本作品には、「おばあちゃん—ママ—まい」という親子3世代の構図が隠れており、「ママ」が登場するたびに、おばあちゃんの人物像もまいの人物像もより明瞭に描かれる。そのため、本節では、親子3世代という側面から本作品の分析を試みる。

前述したように、魔女修行が本作品の重要なテーマである。その肝心かなめは、何でも自分で決める、ということである。「自分で決める」ことの意味を広げて解釈すれば、「自分で選択する」ことも意味するため、「選択」は本作品の重要なテーマの1つであると考えられる。したがって、以下では、親子3世代⁴の「選択」という、従来とは違う側面から、本作品を解析する。

まずは、まいのママから分析する。本作品においては、ママは脇役として登場する。彼女はやや外側の立場から、おばあちゃんの伝統的な考え（家庭を優先にする）の良し悪しとまいの直面した問題（登校拒否）を提示している。それらの提示によって、キャリアウーマンとして描かれたママが、田園でのどかに生活しているおばあちゃんと、登校拒否のまいとどれほど違うのかも分かる。おばあちゃんとまいとの相違が描写されるので、一見、ママは「おばあちゃん—まい」という構図から除外されているように見えるが、ママの言動には、おばあちゃんとまいに類似した部分が見られ、彼女自身は実はおばあちゃんとまいとそれほど違わない。たとえば、本作品に描かれたおばあちゃんとおばあちゃんの暮らし——何でも受け入れられる、器が大きい人（おばあちゃん）が理想郷のような田園で生活をしている——はどちらも理想的である。しかし、ママが結婚する際に、おばあちゃんは「女の人は家にいて家庭を守るべきだ」（128）と考えており、ママに仕事をやめたほうが良いと言っていた。ママは反発して仕事をやめなかった。ママの反発から、おばあちゃんは自分の生き方を他人に押し付けるという傾向があるともいえよう。物語の終盤に入り、まいのために仕事をやめるママは、再び、「おばあちゃんのような生き方は私にはとてもできないわ。私は私の人生を生きるし、おばあちゃんだからといって私にもまいにも自分の生き方を押し付けることはできないはずよ」（153）とおばあちゃんに言い出す。自分は「一切仕事をやめるつもり」（153）ではなく、おばあちゃんと違う生き方を「選択」したことを強調する。おばあちゃんに彼女の生き方を押し付けられたくはないが、自分の娘のまいを自分と同じグループに入れることで、ママはある意味で、おばあちゃんと同じように、自分の生き方（おばあちゃんと違う生き方）をまいに押し付けているのではないか。

まいから学校が「私に苦痛を与える場でしかない」（11）と聞いたとき、ママはそ

の理由にあまり深入りしない。英国人と日本人の混血であるママは「学校というものについぞ溶け込めなかった。(中略) まいのお話を聞いて、学校生活というものを追体験するのが嫌だったのかもしれない」(11-12) とあるように、自分の学生時代のことを思い出したくないので、まいの理由に深入りしたくないようだ。彼女はまいと同じく、大変な思い出を持っていると推測できる。本作品に描かれるママは、夫が単身赴任しているが、ワーキングウーマンとしてバリバリと仕事をこなすイメージが強い。ママがまいとおばあちゃんとどれほど違うのか比較するかのよう、短編の「渡りの一日」(新潮文庫、2001年)ではママが「合理的で無駄を嫌う性格」(198)であると描かれる。このような描写から、ママはおばあちゃんとまいと確かに違うということが分かるが、違う側面から考えると、おばあちゃんと同様に自分の生き方を他人(まい)に押し付けたり、まいと同じように学校生活に嫌な思い出があったりするなど、ママ自身はおばあちゃんとまいとそれほど違わない。まいとおばあちゃんの姿からママの姿が垣間見え、親子3世代の関連性も感じられ、「おばあちゃん—ママ—まい」という構図も読み取れる。本作品の結末では、ママは仕事をやめて、パパの単身赴任先に引っ越し、家族3人が一緒に住むようになる。ママは仕事ではなく、家庭を「選択」した。

次は、本作品の重要な登場人物のおばあちゃんである。彼女は英国人で、日本へ渡航したり、ミッション系の学校の英語教師になったり、日本人と結婚したりなどの、様々な「選択」をしてここまできている。おばあちゃんは不思議な雰囲気の人で、何でもできる完璧なイメージがあるが、まいにとっては「どこか底知れないところ」(14)もある、少し怖い相手でもある。「女の人は家にいて家庭を守るべき」(128)という保守的な部分もあり、タバコを吸うという少し意外なところもある。そして、おばあちゃんは、まいに自分の家系には不思議な能力——予知能力・透視など——が代々受け継がれていると打ち明けるが、彼女はそれを魔力や魔女といった言葉で表現するのではなく、「^{からだ}身体を癒す草木に対する知識や、荒々しい自然と共存する知恵」(44)の持ち主であり、ある特殊な能力を持っている人間でもあると説明する。このように、様々な不思議なところを持っているので、おばあちゃんはまいとママにこっそり「西の魔女」(10)と呼ばれる。しかし、まいとママに魔女と思われ、密かにそう呼ばれても、おばあちゃんは自分で説明したように、魔女ではなく、ある特殊な能力を持っているだけの人間である。おばあちゃんは「西の魔女」と呼ばれても、まいに教えた「上等の魔女は外からの刺激には決して動揺しません」(95)という魔女の心得どおりにできない時もある。物語のクライマックスのひとつとして、おばあちゃんが、隣人のゲンジは死んだほうがいいと言ったまいの頬を打つ場面がある。彼女は外からの刺激(まいの言葉)に動揺して感情的になったのだ。親子3世代の中で、彼

女は「選択する」というより、むしろ、まいとママの「選択」を見守るという立場に立つ。結婚しても仕事をやめなかったが、今は家族のために仕事をやめるというママの「選択」も、別れの言葉をちゃんと言わずに別れるというまいの「選択」も、全部見守る。それがおばあちゃんの「選択」であろう。

最後は、主人公のまいを分析する。前述したように、その魔女修行の肝心かなめである「何でも自分で決める」ということは、より広げて考えると「自分で選択して自分で決める」ということとして考えられる。まいの場合は、「興味もない話題に一生懸命相づちを打つ」(135)ことや、「行きたくもないトイレについて行く」(135)ことが必要となる女子の付き合いのための努力を一切しないということは、ある意味で、ずっと優等生だった彼女にとって、初めて自分で行った「選択」かもしれない⁵。後の彼女の登校拒否も彼女の「選択」であるといえる。しかし、それは同調圧力(仲間はずれ)をかけられ、選ばざるを得ない「選択」である。「選択」の難しさが提起される。「選択する」ことを鍛えるには、おばあちゃんのもとの魔女修行が重要である。自分の意志かどうかを「選択」して決断を下すのである。後に本作品のいくつかの物事に対して、魔女修行を受けたまいが自分で「選択」して自分で決めるようになる。たとえば、まいはおばあちゃんと一緒に暮らすか、転校してパパの単身赴任先に引っ越すか、という「選択」を行い、自分で答えを決定する。

まいは、魔女修行の「自分で決めること」から、もう一歩進んで「自分で選択して行動すること」を模索してきた。魔女修行をとおして、選択能力が鍛えられ、自分の意志もより強くなる。親子3世代の中で、一番弱い立場にいるまいは、おばあちゃんに反発するようになる。本作品にまいの反発はそれほど強烈には描かれていない。基本的には、ゲンジへの怒りをめぐる不満からの反発である。しかし、この反発はまいからの問いかけである。この問いかけは、まいの自分の居場所への不安を反映するものである。まいは、おばあちゃんのところに来た時、自分の使い慣れたマグカップを持ってくる。「使い慣れたこのマグカップがあるとその回りにぼわんとした『自分の場所』のような空間が広がって、きっと予想されるホームシックが防げる」(14)と描かれるように、まいは、自分の使い慣れた品物によって、自分の居場所を確保して拡げる。しかし、まいは自分の家にいる時でもこの「ホームシック」に襲われる。その時は、「胸が締めつけられるような寂しさ」(15)を感じてしまう。まいは、登校拒否になった後、ママがパパにかけた電話の中で自分がママに「扱いにくい子」(12)と言われたことを盗み聞きしたので、ママを失望させたことで不安を感じた。よって、田舎でおばあちゃんと一緒に暮らすということは、まいにとっても「わたしの全体を知って、おばあちゃんのがっかりしないだろうか。ママががっかりしたように」(14)というように怖いことなのである。このように、まいに不安を感じさせる物事

が少なくない。これほど不安な思いをしている自分と違い、自分の大嫌いなゲンジは、何もしないまま簡単に、おばあちゃんに、この田舎に受け入れられている。ゲンジと関わったことから、まいはこの「不思議な田舎の許容の仕方が、信頼していた何かの裏切りのように」(68) 感じる。たとえおばあちゃんから「マイ・サンクチュアリ」(79) をもらっても、それは他人(おばあちゃん)から与えられたものである。自分で選択して行動して手に入れたものではない。ここには自分の居場所はないと微かに察するまいは不安を感じる。この不安からもたらされた反発は、最後におばあちゃんとの衝突となり、まいはおばあちゃんに頬を打たれる。その後のまいとおばあちゃんの生活はいつも通りに見えるが、何かが変わった。おばあちゃんと別れる時に、まいはいつも通りに「おばあちゃん、大好き」と言えなかった。前述の反発に引き続き、この言葉を言わないことも、まいの「選択」である。この一連の出来事で、まいは変わった。おばあちゃんと離れても、「何にしても黙々と最後までやり抜くべく努めるようにしている」(155) と書かれているように、魔女修行を続けることを「選択」した。また、あのときの衝突について、まいは「ゲンジさんのことをあんなにひどく言ったのは、自分でも止めようのなかった感情の『流出』だった」(156) と思う。あの時、まいの言ったことも、おばあちゃんの手荒な行いもどれも「感情の流出」である。

2年後、まいが再びおばあちゃんの家に戻り、ゲンジに再会した時、あの時のゲンジへの嫌悪感はなくなっていた。おばあちゃんとの思い出を回想しながら、ガラスに残ったおばあちゃんの最後のメッセージを読んだまいは、やっと「おばあちゃん、大好き」(163) と再び言えるようになる。そのとき、おばあちゃんからの「アイ・ノウ」(164) という返事がまいの心に響く。このように、おばあちゃんとまいの会話が回復することで、感情のカタルシス作用(浄化作用)が見られ、あの時の衝突——感情の流出——は収斂するのである。

本作品はここで一段落となるが、作者の梨木は、2017年版の書き下ろしである「かまどに小枝を」に、まいが離れた後のおばあちゃんの生活を書いている。おばあちゃんの1人称で、まいとの衝突とその最後の別れについて語られる。その中で、まいのマグカップが再び登場する。この家を去るときに、まいは自分の持ってきたカップを置いていった。このことに対して、おばあちゃんは、「持って帰ることもできたのに、そのうち帰ってくる人のように、自分のマグカップを置いていったのだった。自分ではそんなつもりはなかっただろうけれども」(202) と淡々と語るが、ここにはまいへの愛情が感じられる。短編の最後に、おばあちゃんが、ママとまいのために祈っているシーンも描写される。

この空の下で、私の娘も、その娘も、今、生きている。新しい環境の中で。新しい道を選ぶこと、さらにその道を進むということは、体力と気力がバランスをとっていなければ、なかなか簡単にいくものではない。今はまだアンバランスだとわかっている、他にどうしようもなく、進まなければならないときがある。時の流れは容赦がない。

それでも祈ろう。

彼女たちがこの試練を乗り越えていけるように。

(「かまどに小枝を」、209。下線は引用者。以下同様)

「道を選択する」ことも「選択した道を進む」ことも、どちらも難しいが、それにしても、娘と孫の選択した道を見守っていきたいというおばあちゃんの愛情は本編でも短編作品群でもしばしば描かれている。この短編を通して、本編に語られていない「テキストの空白」が埋まり、短編作品群と本編が会話するような関係を持つことになる。それは、短編作品群と本編が互いに呼応するということで、この呼応を「会話関係」と考えたい。本編に描かれていない「おばあちゃん—まい」、「ママ—まい」の生活のエピソードは短編作品群によって明瞭に描写され、短編作品群と本編との会話関係がおのずと成立する。本編の結末でまいとおばあちゃんの会話が回復するのと同様に、短編作品群と本編の会話（呼応）を通して、『西の魔女が死んだ』作品群に見られる、すべての短編作品群と本編との会話関係（呼応関係）も静かに収斂していくのである。

本節では、親子3世代の3人それぞれの「選択」ということから、本作品を分析した。また、短編作品群との会話関係によって、本編がより深く読み取れることを明らかにした。次の第2節では、本作品に関わる短編作品群を整理しながら検討する。

第2節 『西の魔女が死んだ』の短編作品群

『西の魔女が死んだ』は、おばあちゃんの死から始まる「現在—過去—現在」という倒叙の構成である。読者に結末から打ち明け、安心感を与えることができる叙法になっている。しかし、本作品の世界には、本作品のみならず、他にもいくつかの短編作品がある。それらからなる『西の魔女が死んだ』世界は一層拡がりがある。その世界の構成をよりよく把握するために、まず本編とそれに連なる短編作品群を出版順に整理したうえで、それらの時系列を確認し、相互を照らし合わせて検証する⁶。

A 「信じるものは」(楡出版、1993年)

- B 『西の魔女が死んだ』(楡出版、1994年)
- C 「渡りの一日」(文溪堂、1996年)
- D 「名前の森へ、腕まくりして」(びわの実ノート編集室、1999年)
- E 「冬の午後」(てらいんく、2009年)
- F 「ブラッキーの話」(教育出版、2011年)
- G 『僕は、そして僕たちはどう生きるか』(理論社、2011年)⁷
- H 「かまどに小枝を」(新潮社、2017年)
- I 「お姫様はのぞく」(未発表)

各作品の物語内容を時間順に並べると、A・F→E→B→D→C→G・Hであろう。Bは本編であり、中学生になったまいによる、2年前の中学校入学当初の回想を中心とした話である。Fの時間設定は明記されていないが、物語によると、パパの単身赴任の時期の夏の話で、まいが小学生あたりの話だと推測できる。本編に名前も登場した、かつて飼っていた犬の「ブラッキー」がママを見守っているという少し不思議な話である。Eの短編はまいが小学校最後の冬休みに、おばあちゃんの家泊まる時の話である。CとDは、本作品の続編であり、転校したまいの話である。Dは転校直後のまいがショウコと知り合う話であるが、Cはショウコと友達になった後の話である。出版が最後であるHの「かまどに小枝を」は『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』に収録された書き下ろしである。それはおばあちゃんがまいと一緒に暮らした1ヶ月後の秋あたりの話であろう。

各作品の中で、Cの「渡りの一日」はおばあちゃんの死後の話であるかどうかは明記されていないが、「魔女の修行」(80)と「自分で決めたことをやり遂げる力」(59)を訓練することを続行するまいの姿が描出される。それは、おばあちゃんと離れても自分を磨くという決心であると考えられ、おばあちゃんがまだ生きている時期の話と推測する。AとGは他の短編と違い、本作品のまいが登場しない。両作品とも、CとDに登場した、まいの親友となったショウコの周りのお話である。AとGの時間設定もFと同じく、明記されていない。Aでは、麗奈という女の子が主人公で、1人称で自分とショウコとの「不仲」について語っている。この短編は主人公が小学校高学年か中学1年頃の話であると推測できる。しかし発表時期と内容を考えると、小学校高学年の設定であると考えるのが妥当である。そのため、Aを短編作品群の最初の作品に位置付ける。一方、Gでは、中学生のショウコは物語の前半に登場し、主人公とは言えないが、主な登場人物の1人として活躍している。Gに登場したショウコは、CもDも同様に中学生で、どんなことも相手に直接に言うところは変わらないが、明らかにCの時より成長した姿が見えるので、Cより後の時間設定であろう。

上記の整理から分かるように、『西の魔女が死んだ』世界は、〈まい世界〉と〈ショウコ世界〉に分けられる。その中で、Aの「信じるものは」は〈ショウコ世界〉であるが、本編の重要な要素である、「生まれ変わり」、「死亡」や「魂」などが描かれる。この短編から、本作品のコンセプトの雛型がすでに垣間見えるのである。同じ〈ショウコ世界〉に属するGの『僕は、そして僕たちはどう生きるか』には本編との繋がりが見られる。90年代の本編と、00年代以後のGも登校拒否問題を提起し、さらに、Gは本編を引き継ぎ、「今」の子どもたちが直面する困難を語り続ける。どの作品も、梨木が社会状況の変化を見つめながら創作したものである⁸。このように、一見〈ショウコ世界〉の作品群が本編とあまり関わっていないように見えるが、互いに関係性を持つことは明らかである。〈ショウコ世界〉の作品群と〈まい世界〉の作品群を比較することで、『西の魔女が死んだ』世界をより深く解釈する可能性も示される。

上記の作品以外に、未発表の短編「お姫様はのぞく」もあるようで、それは、まいが転入した学校での物語だという（今江祥智、3）。このように、本作品のスピン・オフが多いことが分かる。2014年に梨木の多くの短編作品を収録した『丹生都比売 梨木香歩作品集』が出版されたときに、彼女はインタビューで自分の考えた短編の魅力について言及している。

長編に比べて、圧倒的に情報量が限られるわけですから、世界を醸成するという点では不利なこともあるけれど、重要なことばやできごとが見過ごされたり読み飛ばされたりすることなくダイレクトに伝わるという利点もありますね。一筆書きの勢いの良さ、というような。（「梨木香歩さんインタビュー」、2014年）

短編においては、情報量が限られるので作品世界を醸成するには工夫が必要であるが、『西の魔女が死んだ』短編作品群のように、長編作品を基にした短編の場合は、その不利な点が克服される。長編の「世界を醸成する」という利点と短編の「重要なことばやできごとがダイレクトに伝わる」という利点が両立できるようになる。しかし、本作品から発展した短編作品群は、長編と短編の利点を共有する以外に、独特な「錯時法」という叙法によって、異なる時点に起きる出来事に焦点が当てられたものであるため、これらからなる『西の魔女が死んだ』世界は一層拡がり、豊かでまとまりのあるものになっている。このように、「異なる時点」の書き方、すなわち、「錯時法」が『西の魔女が死んだ』世界を構成する鍵とも考えられる。次章では「錯時法」とその機能に注目して考察しながら、本編と短編作品群からなる『西の魔女が死んだ』世界の構成を解明し、梨木の込めた創作意図を把握する。

第2章 『西の魔女が死んだ』世界の構成

『西の魔女が死んだ』本編にはいくつかのスピン・オフがあり、それらが『西の魔女が死んだ』作品群となり、『西の魔女が死んだ』世界を構築する。前章では、本編の分析を通して、本編と短編作品群の関連性を見たうえで、本編と短編作品群を取りまとめてみた。本章では、『西の魔女が死んだ』作品群の「錯時法」という叙法を中心に検証し、『西の魔女が死んだ』世界をより明らかにすることで、本編の新たな解釈の可能性を提示する。

第1節 錯時法からなる「物語現在」と「物語過去」⁹の交錯

錯時法には、「先説法」と「後説法」がある。本作品は錯時法の「後説法」を使って、「西の魔女が死んだ」(7)という書き出しによっておばあちゃんの「死」が告げられる。おばあちゃんの「死」から始まり、「現在—過去—現在」という構成で「後説法」をとっている。「後説法」とは、基準点より過去のことを語る叙法である。おばあちゃんの訃報を受けておばあちゃんの家に戻っている時点が基準点となる。物語は、現在（物語現在）、つまり、おばあちゃんの「死」から始まる。次に、おばあちゃんと一緒に暮らしていた1ヶ月の話、すなわち過去を、まいが回想する。本作品では、現在（物語現在）を基準点にしているが、まいの回想では、基準点が何度も変化する。まずそれが見られるのが、次の場面である。おばあちゃんは、まいの選んだ場所を「マイ・サンクチュアリ」(79)と呼び、「まいの場所にしましょう」(78)といて、後に本当に法的手続きをし、その土地をまいにあげてしまう。

おばあちゃんも別のじょうろで裏庭に撒いていた。(中略) まいは大声で笑いながらそれを見つつ、ずーっとあの場所のことを思っていた。ああ、本当にあの場所がわたしの場所になったのだ……。

ずっとずっと後になって、まいは、おばあちゃんが、法律的にも本当にその土地をまいのものにしてくれていたことを知った。そして結局そのことが、おばあちゃんの山全体を開発の波から救うことにもなったのだった。(「西の魔女が死んだ」、79)

これは、回想している現在（物語現在）のまいでも、回想中の過去（物語過去）のまいでもなく、より遠い未来（物語未来）に立ったまいの語りであろう。おばあちゃん

んのところに残り一緒に暮らすという提案を断った場面でも、基準点の変化が示される。この場面は、先に引用した「ずっとずっと後になって」の語りと同じく、未来からの語りであるが、両者は少々違う時点に立って語られていると思われる。

なぜ、そのとき、荒野の中の唯一の避難所のようなあの家で暮らすことを選ばなかったのだろうと、まいは後々まで不思議に思った。しばらく考えさせて、と言うことだってできたのに……。 (中略)

まいの心と身体は、戦闘態勢を解いて穏やかな生活に入ることを拒否したのだ。それが健康なことだったのか、それともひどくいびつなことだったのか。もっと大人になってからも、まいにはわからなかった。

(「西の魔女が死んだ」、84)

おばあちゃんが自分の「死」にかすかに言及した場面における、「そして、二年後、まいにもわかる時がくるのだった」(86)という未来からの語りは、一瞬、現在のまいがいる時点、すなわち訃報を受けておばあちゃんの家に行く時点へ戻るが、次の段落に入ると、再び、まいがおばあちゃんと暮らしていた2年前の時点に立って彼女は語り続ける。読者は最初に、物語現在の出来事——おばあちゃんの死——を基準点として物語過去に目を向けさせられるが、その過去自体がもう1つの基準点となり、それよりも物語未来に起こることを先取りして語る「先説法」が使用される。したがって、本作品では、倒叙構造としての「後説法」と回想話の中に使われる「先説法」の両方を使うことによって、特殊な時間感覚を読者に与える。この錯時的な叙法によって、物語の中の物語が構成されるために、物語過去(回想)と物語現在以外に、本作品には語られていない物語があることが自ずと想像される。それは、後に続編や番外編の発想になる可能性もあり、あるいはテキストの空白——語られていない物語——として『西の魔女が死んだ』世界の豊かさを支えるものとなる可能性もある。

第2節 「声」の届く彼方へ

表1に示したように、本作品は、初版の1994年楡出版版、1996年の小学館版、2001年の新潮文庫版、2017年の新潮社版、と4回も出版されている。

表1 『西の魔女が死んだ』刊行一覧

出版社	出版年	収録作品
楡出版	1994年	『西の魔女が死んだ』本編のみ
小学館	1996年	『西の魔女が死んだ』本編のみ
新潮文庫	2001年	・『西の魔女が死んだ』本編 ・後日談の「渡りの一日」(初出『日本児童文学』第42巻第1号、文溪堂、1996年1月)
新潮社	2017年	・『西の魔女が死んだ』本編 ・短編「ブラッキーの話」(初出『ひろがる言葉 6上』付録、教育出版、2011年) ・短編「冬の午後」(初出『ネバーランド』第11号、てらいんく、2009年4月) ・書下ろしの「かまどに小枝を」

1996年版と2001年版と2017年版を、初版の1994年版と比較すると、表記の調整以外、内容部分にはそれほど違いがない。注目すべきは、ラストシーン——クライマックスとしてのおばあちゃんの残したメッセージ——のレイアウトの変化である。作者の梨木はこのラストシーンのレイアウトに拘っていたが、初版の1994年版でも1996年版でも実現できなかった。しかし、2001年に文庫化されるときに、ようやく彼女の念願のレイアウトを実現することができた。ページをめくると、白地のページの中央に、「ニシノマジヨ カラ ヒガシノマジヨ ヘ／ オバアチャン ノ タマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウ」(梨木香歩、2001年、190)というおばあちゃんのメッセージだけが書かれている。これは2017年版では実現されず、ページをめくると1ページの3分の1にはメッセージの前の文章が書かれており、同じページの半分以上がおばあちゃんのメッセージとなっている。前の文章が終わり、5行も空けた後、おばあちゃんのメッセージが2行に分けて書かれている。行を空けることで余白を作り、整然としたレイアウトではあるが、2001年版と比べると、インパクトが多少弱くなる¹⁰。

2001年版のレイアウトは、印象深く、メッセージの意味深さも感じられる。初版の1994年版も、白地の1ページにメッセージの2行のみを入れるレイアウトであるが、ページをめくった後ではなく、見開きの左側に配置され、右側にはメッセージの前の文章が書かれている。

2017年版のラストシーンのレイアウトは、1994年版のレイアウトよりも、むしろ1996年版のレイアウトに近い。1996年版では、ページをめくった後におばあちゃんのメッセージが書かれ、1行を空けてそのまま続きの文章が書かれている。しかし、2017年版の場合は、空けた行が1996年版より多くなり、1ページのうち、2分の1のスペースにメッセージの前の文章が書かれているが、残った2分の1には、空けた行と、2行に分けて書かれたおばあちゃんのメッセージがある。このように、2017年版

のレイアウトでは、余白をよく利用して文章を配置しているともいえる。この変化は興味深い。1994年から2017年に至る、梨木の創作意識の変化がここから見て取れる。

梨木のレイアウトに対する執着は、ある意味で、そのメッセージの届け方——主人公のまいと本作品を読んでいる読者を対象に、おばあちゃんのメッセージがどのように届けられ、受け取られるのか——に拘っているということであろう。物語は数多くの言葉によって構成される。文章を構成する要素である単語、文節や文などは、どれも物語に入れておくと、目立たず、見逃しがちなものとなる。梨木は、レイアウトを通して、おばあちゃんの残したメッセージをより目立たせ、読者が見逃さないように努力していた。すなわち、1994年版以来、2001年の文庫版出版の際も、おばあちゃんの残したメッセージがどのように伝わるのかを、当時の梨木は重要視していた。しかし、その16年後の2017年版では、特別なレイアウトが一切ない。行を空けて整ったレイアウトで、文章を綴るのみである。2017年版以前のレイアウトでは、梨木は、おばあちゃんの残したメッセージをまいと読者に強調するというより、むしろまいと読者に、届けられるように、わざわざ行をより多く空けておばあちゃんのメッセージを際立たせるというレイアウトをしていた。梨木は2017年版の「あとがき」で、「私たちは、大きな声を持たずとも、小さな声で語り合い、伝えていくことができる。そのことを、ささやいておいで」(215)と述べ、小さな「声」でも人々に届けられるように祈っている。つまり、梨木はすでに「声(メッセージ)」の表現方法に執着しなくなったのだと考えられる。むしろ、「声」が届けられるかどうかを重要視するようになる。2017年版の結末にはまさしく彼女の考え方の転換が示されたのであろう。物語の中のささやかな一言——おばあちゃんの「声」として残されたメッセージ——のようであるが、聞き手がその「声」を聞き逃すわけではない¹¹。どんな「声」でも届けられるということをあらわすように、おばあちゃんの「声」であるそのメッセージは、特別なレイアウトを使わず、前の文章の後にそのまま置かれるわけである。

梨木が「声」の届け方を重要視していることは、2017年版に収録された3つの短編作品からも垣間見える。第1章第2節に述べたように、『西の魔女が死んだ』短編作品群は何作もあるにもかかわらず、なぜ「ブラッキーの話」と「冬の午後」のみ収録されたのか。また、書き下ろしの「かまどに小枝を」は、本編と共に収録された2つの短編とどのような関係性を持っているのか。このような問いについての考察は、梨木にとっての「声」の届け方をより理解する手がかりになると思われるので、次は、2017年版に収録された3つの短編作品を対象に、それらの関係性を分析しながら、彼女の「声」の届け方に対する考え方を明らかにする。

2017年版に収録された本編と、再刊行された「ブラッキーの話」は3人称で、書き下ろしの「かまどに小枝を」は1人称である。一方で、同じく再刊行された「冬の午

後」は初出では3人称であったが1人称に書き直されている。一見、短編作品群における人称の変化が2017年版で強調されるポイントに見えるが、「冬の午後」の改稿には、人称の変化以外に、錯時的な叙法も見られる。「後説法」を使って、小学生のまいの視点ではなく、大人になったまいが当時のことを回想しながら語る。この改稿から、2017年版に収録された作品はすべて錯時的な叙法をとっていることが明らかになる。このことから、どの人称を使用するかということより、錯時法の使用が、2017年版で重要視されるものであると考えられる。この叙法の変化こそ梨木の「声」に対する考え方の転換であり、ここに初めて、本作品の質がはっきりと姿を見せたといえる。

前節で分析したように、錯時的な叙法を使用したことで、語られていない物語があることが自ずと想像されるようになる。2017年版もその点を利用して、本編と3つの短編作品においては、それぞれ違う基準点に立つ語り手から発せられる「声」が本編と呼応している。たとえば、本作品に登場した、犬の「ブラッキー」は、「ブラッキーの話」という短編に発展した。「ブラッキーの話」は3人称で、まいがママからかつて飼っていた犬の「ブラッキー」のことを聞いた話だが、結末に、「今でも、あの時の『ぞくぞく』を思い出すことがある」(180)と書かれているように、物語現在ではなく、少し先の未来からの語りである。語りの基準点の変化と効果については、短編の「かまどに小枝を」により明瞭に表現される。

そして、何年も何年も経って、あの子が成長して、ここを訪れるときがきたら、空の向こうから、木々の合間を通り、梢や葉を揺らしてやさしい風がたどり着き、あの子の耳元にささやくだろう。あの子の心がそのとき、いちばん聞きたいと思う言葉を。

あの子はきっと、聞くだろう。(「かまどに小枝を」、211-212)

この「かまどに小枝を」の結末は、本作品の2つの場面を連想させる。1つは、鶏小屋が野犬やイタチに襲撃された後、まいがマイ・サンクチュアリに異様な「声」を聞いた場面である。周りの木や藪などの葉と葉の擦れ違う音が「——ゆうべの、ゆうべの、あの惨劇。／——闇を切り裂く断末魔／——ああ、厭わしい、厭わしい。／——肉を持つ身は厭わしい」(93-94)というふうまいに聞こえる。そのことについて、おばあちゃんは「その声は、まいが心から聞きたいと願ったものではなかったのでしょうか」(95)と教える。もう1つは、本作品の結末における、「まいが今こそ心の底から聞きたいと願うその声が、まいの心と台所いっぱいにあの暖かい微笑みのよう

に響くのを。／『アイ・ノウ』／と』(163-164)という場面である。2年前におばあちゃんと別れるときに言えなかった「おばあちゃん、大好き」を再び口に出したまいは、ここで、おばあちゃんの声聞く。

このように、2017年版に収録された短編作品群から、梨木が本編の「声」の描写と合わせ、意識的に「声」について提起しているということが分かった。それぞれの短編の「声」を通して、まいの思い、おばあちゃんの思い、まいのママの思いは、1つ1つの物語として語られ、聞かれる。2017年の再刊行版の「あとがき」の最後に、梨木が「声」について、「私たちは、大きな声を持たずとも、小さな声で語り合い、伝えていくことができる。そのことを、ささやいておいで」(215)と述べたように、どんな小さな声でも誰かに聞こえる。『西の魔女が死んだ』作品群から発せられる「声」には、彼方に届けられるように、1つ1つの「声」を大切にしようという梨木の思いが込められている。これらこそこの2017年版の単行本を特徴づけるものであると考えられる。

第3節 本編と短編作品群から織り出す「^{とわ}永久」

第1節と第2節では、『西の魔女が死んだ』作品群における錯時法の使用と効果、また、2017年版に使用された錯時法から梨木の創作意識の変化を検証したが、本節では、錯時法が『西の魔女が死んだ』作品群と『西の魔女が死んだ』世界に与える影響について考察する。

まずは、短編「冬の午後」から述べる。その初出は2009年、2017年に改稿され『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』に再収録される。初出は3人称で、まいとおばあちゃんとの小学校最後の冬休みの暮らしが描かれる。一方、2017年の改稿作では、すでに大人になったまいから1人称の視点で語られる。「小学生の頃、私は学校が長い休みに入るとよく祖母の家に泊まりがけで遊びに行った。このときは六年の、つまり、小学校最後の冬休みだった。」(183)という冒頭の説明により、この作品もまた回想であることが分かる。初出は錯時法をとらなかったが、改稿作は、後説法を使用した。その他には、「あのとき」、「あの祖母」といった描写が作中に散在している。「祖母は、私の運命を言い当てたけれど、対処するおまじないも教えてくれた。自分がそばにいて励ますことができない未来に、この『生き難い』孫が、なんとか自力で生き延びていけるように」(196)というまいの語りは、明らかに未来から過去を回想する時点に立つ。その過去は、「冬の午後」の過去のみならず、本編のこともすでにその過去の一部にある。それらが俯瞰できる遠い時点から、何年も経ってすでに大人になったまいは、すべてを「遠い昔の話」(197)として顧みる。

この作品と同様に、書き下ろしの「かまどに小枝を」も1人称で描かれる。この2017年版の単行本に収録された書き下ろしは、おばあちゃんのモノログである。この短編は、本編の続編であり、まいと離れた年かその翌年の秋の話である。おばあちゃんの日常生活の描写がなされながら、穏やかな雰囲気醸し出されている。まいのことを心配しているおばあちゃんの姿も見られる。「そうだ。銀磨き剤の作り方のメモも書いておかなければ」(207)というように、「生活ノート」と題するノートに銀磨き剤の作り方をおばあちゃんが記入する場面が描写される、ほぼ丸1頁を使って、その作り方が詳しく書かれている。これは、本編で描かれた、おばあちゃんがまいに薬草などの使い方を紹介する場面を思い出させる。「そのうち詳しい使い方を書いておいてあげましょう。いつか必要なときがくるかもしれません」(75)という本編のおばあちゃんの台詞を想起させ、この短編と「冬の午後」、そして本編が互いに呼応する。このように、『西の魔女が死んだ』の世界を構築する複数のテキスト——『西の魔女が死んだ』作品群——が互いに関連し呼応している。この呼応は、前節で論じたように、『西の魔女が死んだ』の作品群から発せられる「声」とも考えられる。

前述したように、作品における錯時法の使用により、作品間に呼応効果が見られ、『西の魔女が死んだ』世界は1編1編の作品によって構築されていく。作者の梨木がより完全なる『西の魔女が死んだ』の世界観を求めていることが明らかになる。また、この作品間の呼応効果は、本編のタイトル名にも提示された「死」と繋がっていることで、本編と短編作品群の関係性も築かれるようになる。本編では、「感受性が強すぎる」(12) まいは、持病の喘息の発作で常に「死」から脅かされており、「死」に不安を感じる。まいの不安を理解したおばあちゃんは「死ぬ、ということはずっと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になることだ」(98)と説明した。つまり、おばあちゃんにとって、「死」はすべての終わりではなく、魂が自由になることで、怖がる必要はないのだ。本編の結末で、おばあちゃんの残したメッセージである「オバアチャン ノ タマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウ」(162)と示されたように、魂の脱出というおばあちゃんの言い方によって、「死」が終わりではないことが再び提示された。本編が終わっても「西の魔女が死んだ」世界の終わりではなく、錯時法の使用によって、本編から短編作品群が生まれ、互いに呼応している。本編と短編作品群から「永久」を織り出しており、「西の魔女が死んだ」世界が続く。このように、『西の魔女が死んだ』作品群に見られる呼応効果自体は、おばあちゃんの考え方——「死」がすべての終わりではない——を具現していると考えられる。短編作品群はそれぞれ独立しているが、互いに関連性を持っているため、連続的なものになる。おばあちゃんの「死」で始まった本編は、おばあちゃんの残したメッセージで結末を迎える。その「死」は終わりであり、新たな始まりでもある。本編に

基づく新たな短編作品群は、本編と繋がり、本編の完結（おばあちゃんの「死」）から、また違うエピソードが誕生する。さらに、錯時法による本編の「テキストの空白」から、新たな物語（短編作品群）がダイナミックに生まれるのである。「死」によってすべてが終わるわけではない。命は受け継がれ、すべてが続いていく。西の魔女は死んでいない、生き続けているのである。

おわりに

本論文は、2017年版の『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』を対象に、まずは、『西の魔女が死んだ』本編における親子3世代の関係性に焦点を当てて本編を分析したうえで、本編と後の短編作品群との関連性を提示した。そして、本編の派生作品である短編作品群を中心に整理し、それらを『西の魔女が死んだ』作品群として、それぞれの作品を時系列順に並べながら『西の魔女が死んだ』本編との関連性を確認した。次に、本編と短編作品群に見られる錯時法の使用を中心に考察した。この叙法によって、読者に特殊な時間感覚を与えることができる。錯時法の使用により、『西の魔女が死んだ』作品群と本編が呼応していることが分かった。これは、それぞれ違う基準点に立っている短編作品群の語り手と本編の語り手が「声」によって会話しているということである。特に、本論文のテキストである2017年版の『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』では、作者の梨木は、これらの「声」を発するために、「冬の午後」を改稿し、他の短編と同様に錯時法を使用するようになる。この叙法の使用によって、短編作品群と本編からの多様な「声」は、2017年版に織り込まれ、読者に届けられるのだと考えられる。

さらに、『西の魔女が死んだ』作品群における、錯時法の使用は、短編作品群と本編からなる「声」以外に、もう1つの目的があるといえる。錯時法は「後説法」と「先説法」に分けられる。錯時法を使用するには、基準点が必要である。『西の魔女が死んだ』本編では、基準点が単一ではなく、複数であるために、全体的には「後説法」によって回想している。しかし、その回想の中では「先説法」が用いられ、他の基準点に移動し、語り手の立つ時点が未来になる。「後説法」と「先説法」が混在することで、短編作品群が本編と呼応し、短編作品群が本編を継承すると捉えることができる。この継承は、『西の魔女が死んだ』世界における「死」と「生」の関係性——「死」の持つ「生」の可能性——を体現しているといえないだろうか。

本論文では、『西の魔女が死んだ』本編と短編作品群の叙法を中心に考察し、『西の魔女が死んだ』本編の新たな解釈の可能性を再考したうえで、作者の創作意図を把握

し、梨木の創作における『西の魔女が死んだ』本編の重要性を再び確認した。1つの作品が20年以上も読者に愛読され、違う形で何回も出版されることは多くない。『西の魔女が死んだ』作品群の再出版の意義と現代における位置づけ、また『西の魔女が死んだ』世界観が梨木の他の作品に与える影響などについて問い直す必要もあり、これらは梨木香歩研究の今後の重要な課題である。

文末脚注

- 1 たとえば、『小学一年生』2019年9月号の保護者向け別冊としての情報マガジン『HugKum (はぐくむ)』の特集に映画版の『西の魔女が死んだ』が取り上げられた。取り上げられた8本の映画の中で、唯一の日本映画である。
- 2 『西の魔女が死んだ』作品群とは、デビュー作の『西の魔女が死んだ』本編とそれを中心に発展したスピン・オフの短編を指す。具体的に含まれる作品は第1章第2節を参照。また、『西の魔女が死んだ』では、初版となる1994年検出版、1996年出版の小学館版、2001年出版の新潮文庫版、2017年出版の新潮社版といった版が出版されている。本論文では、出版年で各版を区別する。また、各版の相違については、小学館版は、初版の検出版刊行の内容と変わらない。新潮文庫版では、後日談の「渡りの一日」(初出『日本児童文学』第42巻第1号、文溪堂、1996年1月)が載せられた。新潮社版では、「ブラッキーの話」(初出『ひろがる言葉 6上』付録、教育出版、2011年)と「冬の午後」(初出『ネバーランド』第11号、てらいんく、2009年4月)、及び書下ろしの「かまどに小枝を」が収録された。
- 3 本論文では、『西の魔女が死んだ』を論じる時、「本編」と「本作品」という、2つの表現を使用する。前者は『西の魔女が死んだ』作品群において、『西の魔女が死んだ』とそれに連なる短編作品群の相対性と関係性を示すため、「(『西の魔女が死んだ』)本編」と記し、「短編作品群」と対照する。後者は、『西の魔女が死んだ』本編を分析対象にする場合、「本作品」と記す。
- 4 本論文では、おばあちゃんとママとまいという、主な登場人物である親子3世代の3人を対象に分析する。登場人物のジェンダー研究ではなく、親子3人の世代差を研究対象にする。しかし、本作品においては、男性登場人物の不在も1つの重要なテーマだと思われ、梨木香歩の他の作品におけるジェンダー性と一緒に論じる必要があるが、本論文の論点が逸れるおそれがあるため、本論文では触れずに、別の機会に論じることにする。
- 5 不登校は相当複雑な問題であるが、本論文では、おばあちゃんとママとまい、

親子3世代を中心に比較するために、テキストを分析する上で、主人公まいの行為を「選択」という側面から解釈する。

- 6 『西の魔女が死んだ』作品群については、本論文では、本編と短編作品群を比較するために、本編のまいが登場した短編作品群を中心に論じる。本編の最後に登場したショウコは、スピン・オフの短編「渡りの一日」以外に、他の短編（「創作 信じるものは」、『飛ぶ教室』第48号、楡出版、1993年11月）と作品（『僕は、そして僕たちはどう生きるか』、理論社、2011年）にも見られる。それらの作品では、作中の「ショウコ」が『西の魔女が死んだ』のショウコであると明記されていないが、作品の内容から同一人物であると判断できる。それらは『西の魔女が死んだ』世界と関わっており、『西の魔女が死んだ』作品群に含まれるが、本編のまいが登場しないので、本論文の研究対象として深く分析しない。
- 7 『僕は、そして僕たちはどう生きるか』は長編作品である。この短編作品群のリストに入れるのは適切ではないが、この作品も『西の魔女が死んだ』作品群に属し、『西の魔女が死んだ』世界とも関わっており、本作品や他の短編作品群との関係性も見られるので、このリストに入れて、短編作品群の一部として見なす。
- 8 本論文では、『西の魔女が死んだ』作品群の関係性に注目し、本作品とAとGの関係性のみ言及する。本作品とAとGの比較分析については、本論文の論点が逸れるおそれがあるため、本論文では触れずに今後、別の機会に論じることとする。
- 9 橋本陽介（講談社、2017年）はジュネットの『物語のディスクール』を基にして、物語の時間に関する考察をした。彼は、さらに日本文学を対象に、物語の時間と物語の文法について分析した。彼は、物語の時間を「物語現在」と「物語過去」に分けてまとめた。本論文は橋本陽介の論を参考にした。
- 10 レイアウトの変更については、編集者側が主導権を握るはずであり、基本的には作者が意見を出すわけではない。しかし、公式の記録ではないが、梨木香歩自身は、2002年4月25日に京都精華大学の「裏庭の周辺を歩く」講演会で、文庫版のレイアウトについて、「文庫版でとっても満足しているのは、私の願いが初めて実現したこと。最後のおばあちゃんの落書きをまいが見つけたところでは、読者もまいと同じように突然それを発見したと思って欲しかったので、ページをめくったところに配置しました。」（「裏庭の周辺を歩く」（梨木香歩さんの講演会レポート）」<http://www6.plala.or.jp/bookshelf/nashiki-report.htm>、2019年10月25日閲覧）と述べ、レイアウトに関するこだわりに言及した。筆者は、新潮文庫版だけではなく、2017年版が出版される時も、梨木香歩自身がレイアウトに意見

を出している可能性が高いと推測する。

- 11 『西の魔女が死んだ』本編では、「声」の描写が何箇所も見られる。たとえば、おばあちゃんが、自分の祖父が不思議な「声」を聞いたことで海難から生き残った話をした場面である。また、鶏小屋事件（飼われた鶏が全部野犬かいたちに食べられ、殺された）後、まいはマイ・サンクチュアリで、森の中の雑音が陰しい「声」のように聞こえたという描写もある。筆者は、『西の魔女が死んだ』本編の「声」を梨木の2017年版の「あとがき」に書かれた「声」という一語と繋げて、この「声」を、作者の創作意図を探る手がかりにして論じる。しかし、「声」といっても、音声言語の「声」と違い、文字で表現された「声」であるので、より広げて「声」の意味の幅を解釈できると考えられる。この「声」が本文に言及された「メッセージ」と関係性を持つと考えられる。特に本編の結末に見られたように、まいがおばあちゃんのメッセージを見た後、おばあちゃんの「アイ・ノウ」(146)という「声」がまいの心に響くという場面は、おばあちゃんの残した「メッセージ」がおばあちゃんの「声」をもたらしたと解釈することもできる。梨木が2017年版の「あとがき」に記した「私たちは、大きな声を持たずとも、小さな声で語り合い、伝えていくことができる。そのことを、ささやいておいで」(215)というように、ある意味で、彼女は、自分の創作を通して、文字という形によって、表現している。つまり、彼女は、ささやかな「メッセージ」を構成して、そこから小さな「声」を発して、世の中に届けられるように試しているであろう。

主要テキスト

梨木香歩 『西の魔女が死んだ』 楡出版、1994年

梨木香歩 『西の魔女が死んだ』 小学館、1996年

梨木香歩 『西の魔女が死んだ』 新潮文庫、2001年

梨木香歩 「冬の午後」『ネバーランド』第11号、てらいんく、2009年4月、2-11頁

梨木香歩 「ブラッキーの話」『ひろがる言葉 小学国語6上』付録、教育出版、2011年、124-137頁

梨木香歩 『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』新潮社、2017年

参考文献

- 石原千秋『読者はどこにいるのか——書物の中の私たち——』（河出ブックス）河出書房新社、2009年
- 今江祥智「前説」『飛ぶ教室』第48号、楡出版、1993年11月、2-3頁
- 斎藤美奈子「特集 大人のための児童文学 コドモの読書の過去と現在」『文学界』第59巻第11号、文藝春秋、2005年11月、134-146頁
- 佐藤宗子「〈梨木香歩論〉〈現〉と〈幻〉を渡る——梨木香歩作品群の世界——」『日本児童文学 特集 高橋秀雄・中脇初枝・梨木香歩——90年代から、現在へⅡ——』第60巻第5号、小峰書店、2014年10月、60-63頁
- 沢崎友美「『自己物語論』の視点から児童文学を読む——〈読みかえの物語〉としての『西の魔女が死んだ』を中心に——」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』第12号、2009年3月、55-74頁
- 瀧 晴巳「梨木香歩 ロングインタビュー」『ダ・ヴィンチ』第15巻第7号、メディアファクトリー、2008年7月、22-31頁
- 土田知則、青木悦子、伊藤直哉『現代文学理論』新曜社、1993年
- 梨木香歩「創作 信じるものは」『飛ぶ教室』第48号、楡出版、1993年11月、42-47頁
- 梨木香歩「渡りの一日」『日本児童文学』第42巻第1号、文溪堂、1996年1月、108-119頁
- 梨木香歩「童話を書こう 人間を一番深層まで震わせることは児童文学にしかできない」『鳩よ！』第169号、マガジンハウス、1997年12月、4-5頁
- 梨木香歩「名前の森へ、腕まくりして」『びわの実ノート』第9号、「びわの実ノート」編集室、1999年11月、77-91頁
- 梨木香歩『僕は、そして僕たちはどう生きるか』理論社、2011年
- 梨木香歩『丹生都比売 梨木香歩作品集』新潮社、2014年
- 梨木香歩『やがて満ちてくる光の』新潮社、2019年
- 根本眞弓「『西の魔女が死んだ』に見る不登校を呈する思春期女子の心理：精神分析・対象関係論の観点から」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第4巻、2014年1月、23-32頁
- 橋本陽介『物語論 基礎と応用』講談社、2017年
- 「発育のススメ 夏休みに親子で観たい映画」『HugKum (はぐくむ)』（『小学一年生』9月号保護者向け別冊）9月号、小学館、2019年8月、7-9頁
- 「ゼロ年代総まくり！売れてる文庫ランキング」『ダ・ヴィンチ』第16巻第11号、メ

ディアファクトリー、2009年11月、18-31頁

「梨木香歩さんインタビュー」、BOOK SHORTS 〈<https://bookshorts.jp/nashikikaho/>〉
2014/10/23、2019年09月11日閲覧

「[ロングセラーの周辺]『西の魔女が死んだ』梨木香歩著」『読売新聞』書評、2011
年2月14日月曜日・東京夕刊、7頁（ヨミダス歴史館データベース 〈[https://
database.yomiuri.co.jp/rekishikan/](https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/)〉）2019年09月13日閲覧

「[裏庭の周辺を歩く]（梨木香歩さんの講演会レポート）」本棚（ファンサイト）
〈<http://www6.plala.or.jp/bookshelf/nashiki-report.htm>〉 作成日不明、2019年10
月25日閲覧